

京都芸術教育フォーラム 「芸術教育と理科教育の共通点」 振り返りレポート

京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター / アートリンクセンター

北野 諒



「芸術教育と理科教育の共通点」をタイトルに掲げたフォーラムは、大野 館長によるレクチャーからスタート。大野 館長が実践した三葉虫観察ワークショップなどの事例を引きながら、「観察・推理・対話・確かめ」という理科の学びにおける基本的な構造を明らかにした。

続けて、福と連携しながら行っているACOP（対話型鑑賞）のワークショップにも言及。ACOPの基本的な要素である「みる・考える・話す・聴く」は、「対象をじっくり観察し、仮説をたて、他者とともに検証する」という、まさに理科の根本となるプロセスそのものであることを提示した。

レクチャーの後半では、脳科学や認知心理学の観点から「美」を研究する「神経美学」に触れ、「『美しさ』は生き残りの試行錯誤の結果獲得された認知能力ではないか」という説を紹介した。また大野 館長は『理科における探求も「不思議さ」という情動から始まるものでは』と仮説をたて、芸術 = 感性 / 科学 = 理性という区分に根本的な問いを投げかけた。

さらに、この「美しさ / 不思議さ から始まる探求によってサバイバルしていく」という図式が、現代の急激な技術革新によって崩壊しつつあるのでは、と危惧を示し、「技術優勢時代の生きる力」として「言語化されていない知恵（五感・好奇心）の活用」「対話による知恵の共有・創発」を挙げた。以上の大野 館長のレクチャーを受け、フォーラムは非常に大きな問題設定に開かれた。



続く第2部では、各大学と小・中学校との連携実践報告が行われた。本学からは、高野中学校での「ねぶた共同制作」を発表。参加学生である日本画コース4回生の山崎千智さんは「課題となるテーマを解釈する、生徒たちの言語力・発想 / 構想力に驚いた」と指導の場面を振り返った。最後に、本学アートリンクセンターの石山が実践報告をまとめ、『芸術「を」教えるのではなく、芸術「で」教える』というテーマを示した。

つまり、「ねぶた制作の技術」を教えるのではなく、発想するためのディスカッション、グループでコミュニケーションしながら課題を解決することなど、制作の過程で培われる基礎的な力をこそ、芸術「で」教えるのである。ちなみに、高野中学校では連携授業に協力していただいた美術教諭の大鷲先生は、ねぶた共同制作で用いた発想のグループワークを、授業のなかに取り入れておられるそうだ。現場での変化が着実に芽吹きつつあることが確認された実践報告だった。

これらのレクチャー・実践報告を受け、大野 館長と福による講評・提言が行われた。フランクな雰囲気進む対談のなかで、福は「芸術教育は知的探求心を刺激し、目的意識をもった観察力をも養う」ものであり「理科の学習指導要領にも近いもの」と指摘。理科教育・芸術教育の双方から、その共通点が明確に示された。

会場からの質問では、『芸術「を」教え、芸術のプロフェッショナルを育成することも必要なのでは』という意見が挙がった。これに対し福は『芸術系大学卒業生でアーティストになるのはごく少数。むしろ、それ以外の大多数を「サポーター」として、つまりアートと共に生きていく「プロフェッショナル」として育てることが必要なのでは』と応答した。「芸術を / 芸術で」という区分を表面的な対立として捉えるのではなく、芸術「で」培われる生きる力こそが、サバイバルのための術（アート）である、と考えるべきなのだろう。

フォーラムの途中、石山は「そもそも、という根本的な観点が必要である」と提言し、第2部を締めくくっていた。芸術教育とは、理科教育とは、そこで育成されるべき力とは、子どもたちの、私たちの未来とは……。今回のフォーラムは、「そもそも」の原点に立ち返り、もう一度歩を進めるためのきっかけとなるものだったのではないだろうか。